

2012 年度後期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント —文芸学部—

文芸学部長 戸部 順一

今回の授業評価アンケートは 430 科目を対象科目として実施され、前期の対象科目数 176 科目よりだいぶ増えた。それでも回答科目数の割合が 88%であったのは、授業評価アンケートの重要性への認識が定着したあらわれであろう。アンケートの各設問項目の数値を前期に実施された際のアンケート結果と比較したとき、10 項目において数値が改善されていた。設問 1 の「この授業によく出席した」では、80%以上に出席したと回答した学生の割合は 90% であり、前期集計結果に比して 0.5 ポイントの下降を見るものの、後期に入っても依然として高い出席率を示しており、これは文芸学部で提供した科目が「つまらない授業」ではなかったことを語っている、と言えよう。設問 2 の「授業中意欲的に取り組んだ」も平均値 4.21 を得ており、前期の集計結果よりもわずかによくなっているが、これも学生の授業に対する関心が維持されていたことを教えてくれる。設問 3, 4, 5, 7, 8 は教員の授業の取り組み方に関する設問であるが、これらの平均値はすべて前期集計結果を上回る値になっている。学生が教員の指導方針に慣れてきたことが改善をもたらしたのだろう。設問 8 の「授業への教員の熱意を感じた」の平均値が 4.50 に上がっているのも、学生が教員の授業・指導方法を納得し、それを受け入れた結果だと考える。ただ、熱意のあまりか、設問 9 の「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」が 0.08 ポイント下がっている。双方向的授業の展開が望まれる現在、今少しの工夫が必要かもしれない。とは言え、設問 6 の「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」—前期集計結果で唯一平均値が 4 を下回った設問であった—が 4.13 に改善されたのを見ると、教員側の工夫が功を奏したのは明らかであり、その努力は敬意に値する。

学生との授業内容に関する契約であるシラバスについて、設問 10 の「シラバスと内容が一致していた」が平均値 4.42 という高い数値であったことは誇るべきであり、教員が計画通りに授業を展開しているからこそ、設問 12 の「総合的にこの授業を評価できる」が 4.48 という高評価になった、と言えよう。各設問の平均値から、文芸学部の開設科目は概ね成功している、と判定してよさそうだが、我々教員としてはこれに満足することなく、さらなる努力を授業改善に注いでいくことを、アンケートに真摯に回答してくれた学生に誓うべきであろう。